九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

玉島川仙媛攷

高木，市之助

https://doi.org/10.15017/2556518

出版情報：文學研究. 35, pp.35-46, 1946-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

玉島川仙媛攷

高木市之助

萬葉集に埋藏されてゐる色々の神仙譚や美人傳を掘り出す事は隨分面白い仕事であり、現に之を試みる人も少くないやうであるが、玉島川仙媛を考へるといふ事は實はさうした傳說學乃至民俗學的な仕事ではない。なぜなら此の仙媛はさうした民間傳說によつて語り傳へられて來た、例へば浦島傳の女主人公や葛飾の眞間の手兒奈とは聊かその趣を異にし、この川沿ひにさうした不思議な仙媛の物語が作者以前から榮えてゐた譯でもなく、唯或特定の歌人卽ち時の太宰帥大伴旅人卿の創作に係る、謂はゞもつと文藝的なしろものだからである。尤もこのやうな創作的な仙媛にも系圖や素生がない譯ではなく、さうしてそれを探るといふ事には又それ相當の興味が無くもない。もつと率直に言ふならば、文學を對象とする研究では、この方が本物なのであつて、その他は稍きびしい意味に於て文藝學のよそものなのであらう。

天平二年陰歷四月の初旬、時の太宰帥大伴旅人卿はその管轄地である肥前松浦川の附近を巡視したらしく、彼が當時の創作に係る遊於松浦河序並に十一首の和歌を、同年春の觀梅宴に參會した人々の作三十二首並に序の文と共に奈良の吉田宜に贈つた事は宜の返書で略々明かである。玉島川の仙媛とはこの遊於松浦河序並びに贈答和歌の女主人公

の事で、頗を厭はず右の序の全文と並に和歌を左に掲げる事にしたい。

遊於松浦河序

余以暫往松浦之縣消遙。聊臨玉島之潭遊覽。勿値釣魚女子等也。花容無雙光儀無匹。開柳葉於眉中發桃花於頰上。意氣淩雲風流絶世。僕問曰。誰鄉誰家兒等。若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰。兒等者漁夫之舍兒。草莊之微者。無鄉無家。何足稱云。唯性便水。復心樂山。或臨洛浦而徒羨玉魚。乍臥巫峽以空望烟霞。今以邂逅相遇貴客。不勝感應輙陳欵曲。而今而後豈可非偕老哉。下官對曰。唯唯敬奉芳命。于時日落山西。驪馬將去。遂申懷抱。因贈詠歌曰。

阿佐里須流　阿末能古等母等　比得波伊倍騰　美流爾之良延奴　有麻必等能古等（八五三）

答詩曰

多麻之末能　許能可波加美爾　伊返波阿禮騰　吉美乎夜佐之美　阿良波佐受阿利吉（八五四）

蓬客等更贈歌三首

麻都良河波　可波能世比可利　阿由都流等　多多勞流伊毛河　毛能須蘇奴例奴（八五五）

麻都良奈流　多麻之麻河波爾　阿由都流等　多多世流古良河　伊弊遲斯良受毛（八五六）

等富都比等　末都良能加波爾　和可由都流　伊毛我多毛等乎　和禮許曾末加米（八五七）

娘等更報歌三首

和可由都流　麻都良能可波能　可波奈美能　奈美邇之母波婆　和禮故飛米夜母（八五八）

波流佐禮婆　和伎覇能佐刀能　加波度爾波　阿由故佐婆斯留　吉美麻知我弖爾（八五九）
麻都良我波　奈奈勢能與腾波　與等武等毛　和禮波與腾麻受　吉美遠志麻多武（八六〇）

後人追之詩三首　帥老

麻都良河波　河波能世波夜美　久禮奈爲能　母能須蘇奴例弖　阿由可都流良武（八六一）
比等未奈能　美良武麻都良能　多麻志末乎　美受弖夜和禮波　故飛都々遠良武（八六二）
麻都良河波　多麻斯麻能有良爾　和可由都流　伊毛良遠美良牟　比等能等母斯佐（八六三）

ところで序文に「余」とあるのはこのやうに一人稱の代名詞を使つてゐるところから解しても一應作者自身ではあるが、併し歌に入ると「蓬客等」と半ば客觀的に叙してゐるし、更に「後人」に擬した最後の三首の作者は明かに架空の人物でしかないから、これ等の作歌の主人公に吾々は果してどの程度實在の旅人を豫想出來るかは問題であらう。況してこのやうな實在性に乏しい主人公の前に忽爲として姿をあらはした仙媛に對して吾々は唯作者旅人によつて創作された架空の一女性を感得するばかりであつて、その背後に事實そのやうな仙媛がゐた譯でもなければ又そのやうな傳説が當時行はれてゐた譯でもないのである。問題は唯、そのやうに歴史や傳説と無關係に「創作」された仙媛がどのやうにしてこの一連の贈答和歌の世界に誕生したかといふ、謂はゞ創作の過程に係るのである。勿論それは新規未開拓な問題ではない。凡そこのやうな創作を旅人が何によつて思ひついたかといふことは諸注に於て既に屢々採り上げられてゐる事であつて、それはそのまゝ仙媛の誕生を解く鍵となるであらう。例へば森本治吉氏はその總釋に於てこの作品が、神功皇后の釣魚の傳説を一因とし、遊仙窟の説話を他の一因とし、斯く内外の種子を合一して出

來上つたものである事を主張してゐる。神功皇后が此の川のほとりで魚を釣つて戰勝を卜したまうたといふ肥前風土記所載の傳說は萬葉の同じ五の卷所收歌（八六九）に

多良志比賣　可尾能美許等能　奈都良須等　美多多志世利斯　伊志遠多禮美吉

などとうたはれてゐる事によつても分るやうに、當時少くともこの地方に行はれてゐた事は確かであり、同樣遊仙窟が旅人の愛讀書の一であつた事も亦明らかであるから、森本氏のこの主張は吾々にとつて十分納得の行く事である。してみれば仙媛の誕生も亦このやうな內外兩傳を因としてゐるのであつて、たとへばをとめの「君をやさしみあらはさずありき」といふ嬌態には遊仙窟で桂心が兒家堂舍賤陋供給單疎と辭退する趣から生れた何ものかゞあり、同時に「松浦川川の瀨光り年魚つるとたゝせ」る仙媛の氣高い風姿は息長足姫尊が年魚を釣りあげてめづらしとのたまうたとある風土記の所傳につながる何物かであり、凡そこのやうにして旅人の創作に係る仙媛はこの二つの所傳から生れ出たものと考へる事が出來るであらう。

併しながら考察はこれで十分であらうか。換言すればこのやうな內外の兩關聯のみが旅人の詩心に仙媛を孕ましめるに十分な條件であつたであらうか。詳しく言へば、旅人は確かに遊仙窟からこの一連の歌物語めくものを思ひついたであらう。更に併し彼に遊仙窟を思ひ出さしめたものは何であらう。そんなものは無かつたともいへなくはないけれども、卑見に隨へば當時の彼の詩心を搖蕩したものは遊仙窟から彼の仙媛を生み出した關聯よりもむしろそのものから遊仙窟を思ひ出さしめたもう一つの、或はもう一段溯つた、さうしてもう一段高い別の關聯なのである。彼は又確かに仙媛に年魚を釣らせる手を垂綸石の傳說から學びとつたのではあらう。けれども神功皇后にまつはるこのやう

な傳說が無かつたとしたら彼の仙媛は年魚を釣つたりなぞしなかつたであらう、更に「若年魚つる松浦の川の川なみの」とか「年魚子さばしる君待ちがてに」とかいふ風に年魚の關聯によつてあのやうに、清楚なをとめ心をこの仙媛に植えつける事を吾々は旅人に斷念しなければならなかつたであらうか。さうして私はそれを必ずしもそのやうに否定的には考へ得ないのであつて、彼がこのやうに年魚つるをとめを創造した事には息長足姫の傳說とは別に或はそれと共に、さうしてもつと深くこの詩人の胸に巢くふ何ものかゞあつた事を思はざるを得ないのである。

この謎を解く爲に私は去月（十月）廿六日から廿七日へかけて玉島川の流域を溯つてみた。一体萬葉集ではこのやうに松浦河或は松浦の河と呼び、又時に同じ河を「松浦なる玉島河」とか「玉島のこの川上」とか言つてゐるが、今日では松浦川と玉島川とは全然別個の河である。松浦川は唐津市を兩斷して灣に注ぐ相當に大きな洋々たる河川であつて旅人の仙媛を彷彿させるには凡そ緣遠い景觀を持つて居る事が豫備的な調査（本年國文科卒業の山田輝彥君が昨年相當に詳しい實地踏査をして來てゐる。以下豫備的調査を記する場合には主として同君のこの踏査を示すものと解して頂きたい）で分つてゐたので今度はこの河を溯る事を割愛した。玉島川は松浦川川口から凡そ、二里程東方濱崎町のはづれ近く海に入る稍小さな川であつて、そこに神功皇后の傳說の岩もあり、鄕土研究家や萬葉諸注によつても略々この仙媛の誕生した歌の「松浦川」と見當をつける事が出來てゐたので、私はこの玉島川を溯つて見たのである。尤もこれも豫備調査によつて分つた事であるが、領布麾山の北麓一帶の平地は萬葉時代には海であつたと想像され、少くとも往時の海岸線は現代よりも遙かに陸地深く入り込んで居た事については貝塚、玄武岩層に殘つてゐる蜂窩狀の浸蝕の痕、舟つなぎ石、引舟口等の名稱が現在の陸地に遺存してゐる事實其の他の證據によつて推定されるの

で、萬葉時代に於ける玉島川の流域なるものも大体に於て今日の玉嶋神社（祭神は神功皇后で傳説の垂綸石も近年川底から掘り出して社の前に横たはつてゐる）から上流に豫想しなければなるまい。尚又玉島川の支流に平原川と呼ぶ小川があつて、問題の歌はこの支流を溯つた字座主と呼ぶあたりで作られたといふ俗傳があるらしいが、その根據は「この川上に家はあれど」の歌の座主の川上神社に結びつけたものらしく、且つ序文に所謂「玉島之潭」とある潭の字に相當するやうな景觀は少くとも今日の平原川には求め得ないので、（これも豫備調査の結果であるが二十七日には私も亦實地踏査によつて之を確め得た）私の踏査は主として玉島川の本流を玉島神社附近から七山町役場の所在地點迄溯る事に限定する事が出來た。

實はこの踏査は歌に所謂「春されば年魚子さばしる」とある陰暦四月の頃に試みられなければならなかつたのだが丁度その頃から空襲の爲に旅行の自由が奪はれ、終戰後も引續き社會の大きな推移や頻々と起つた暴風雨などの爲に延び〳〵になつてしまつた。隨つて今頃こゝを訪ねるといふ事は假令連日の秋晴れには惠まれやうともそれだけ水も涸れて、千年の昔、川上の森林が神代ながらに茂つてゐたであらう時代の水量を彷彿させるには不適當だつた筈である。ところが幸か不幸か、今年九十才になつたといふ土地の故老が始めて經驗したと私に語つたほど洪水はこの仙境にも恐らく未曾有の猛威を振ひ、川筋の隨所で橋梁を破壞し家屋を押し流し、バスの通ふ縣道をあぶなく徒歩で通り抜ける程に切崩して目もあてられぬ有樣であつたが、その代りには水量が珍しく增して、溪流を近年には見られない程度に（と途中で道連れになつた老人が話した）豐かなものにしてゐた。而かも十月二十六日といへばそれからもう數旬の月日が經過してゐた爲に、水はその量にも拘らずいつしか青々と澄みきつて、恐らくは萬葉の昔を偲ぶに近い

景觀をとり戻してくれてゐた。村人に對して誠に氣の毒な言ひ方をすればそれは古への姿を求めて訪ねたこの遊客にとつては誠にありがたい恩惠であつたのだ。

玉島神社から七山町へ道は終始玉島川に沿つて上るのであるが、神社から僅か二三丁で既に峯巒が兩側から迫り、川は涼々たる瀨の音に淨められる。更に數丁溯つたところに鵜の首といふ一大彎曲部があつて、そこから七山町の字藤川のとりつきまで凡そ一里もあらうか、その間に殆ど應接に遑ないまでに萬葉人の所謂〃落ちたぎち流るゝ水〃の景觀が展開されるのであつて、それは正に「七瀨」の名に値すると共に、さうした瀨々に挾まつて屢々青澄んだ深淵が横たはり、それらは更に〃岩に觸りよどめるよど〃即ち「七瀨のよど」を想はしめるに十分であり、さうして私がそこに感じ得たものは要するに萬葉人のふるさと吉野川の面影だつたのである。

一體吉野川の景觀は――特に宮瀧附近からその上流、つまり萬葉人の詩境として考へられる――ひとしく谿谷の美とはいつても、朝鮮の金剛山とか九州でいへば耶馬溪とか日向神などとはちがつた型を有つてゐるやうである。後者では、原則として谿の兩岸に奇峭險峻な巨巖や絶壁が聳え立ち、人々は時として足下の溪流を忘れてかうした〃山の領域〃を仰視する事によつて彼等の美意識を滿足せしめられるのであるが、前者には實はさうした仰ぎみる何ものもなく、山々はむしろ平凡に――といつて悪ければ淡々として兩岸を形成してゐるに過ぎない。さうして人はその代りに逆に「川」の領域を俯瞰する事によつて滿足するのである。岩は屢々唯一枚の川底を形成し、清流が油のやうにその上を滑り下るかと思ふと忽ち他の岩が悪鬼のやうに亂立して之を飛沫に粉碎する。さうして吉野に於て宮瀧の「たぎつ河内」がさうした謂はゞ俯瞰型の景觀として川筋全體の一つの「やま」でありながらその兩岸には仰視に値する

やうな何ものもないやうに玉島川流域の〃七瀬〃に於て（といつても今日七瀬とか或は之に近い名稱が殘つてゐる譯ではない）〃やま〃を形成してゐるのが鵜の首であつて、川はそこで對岸の突出部によつていかにも强引に迂曲を餘議なくされ、迂曲はやがて激流の奔端となり又深淵のよどみともなつて此の川筋に於ける俯瞰型景觀の最大の「やま」を作してゐるのである。「鵜の首」が形勝である事は豫備調査の語るところであつたが、私は此の附近だけ川から少し離れてゐる縣道から之を俯瞰した瞬間に、路傍の行人にたづねるまでもなくそれが鵜の首である事を直觀する事が出來た。それほど特徵を持つた、謂はゞ川筋一帶に君臨する「やま」なので、この關係は吉野の宮瀧の吉野川筋に於ける前述のやうな關係に匹敵するのである。

私は路傍の石に腰を下し、多少の距離を隔てることによつて幾分客觀化されたこの俯瞰型谿流を前にして序文中の冒頭句をもう一度靜かに反芻して見た。

余ハ暫ク松浦ノ縣ニ往キテ逍遙シ聊ヵ玉島ノ潭ニ臨ミテ遊覽ス勿チ魚ヲ釣ル女子等ニ値ヘリ……

本文に於て「遊覽ス」迄は創作とはいひ條旅人の經驗と無關係ではない。「逍遙シ、潭ニ臨ミテ遊覽」した者は現實の旅人である。旅人のこのやうな逍遙遊覽の實經驗に觸發されて遊仙窟が想ひ出され仙媛が誕生したのである。とすれば彼をしてこのやうな幻想を生ましめた具象現實の「玉島ノ潭」は何處であらうか。逍遙や遊覽とは唯漫然とこのやうな奇勝の連續する所謂七瀬を上り且つ下れば足ると言つてしまへばそれまでゞあるが、併しさうした逍遙にもおのづから「やま」が豫想されはしないか。それは丁度この私が今しも足を停めて鵜の首の勝を俯瞰嗟嘆してゐるやうに古への歌人も亦こゝに足を停めて俯瞰し嗟嘆しなかつたであらうか――これは勿論私の勝手な偶感以上の何もので

もないが少くとも鵜の首の地點が古への旅人の「七瀬」に於ける一つの景觀的急所であつたとは言へるのではないか。こゝで旅人の仙媛が生れたといふのは言ひすぎであらうが、例へばこのやうなところで生れたとは結構いひ得る事ではないか。「玉島ノ潭」は其の實複數であつて現に私が今通つて來た、或は更にこれから送り迎へるであらう激湍の前後にまるでつきものやうによどんでゐる幾つかの潭の總稱に過ぎないであらうけれども、もしさうした潭の中で特に彼の詩心を搖り動かしたものつまり、彼の、この創作を誘發したものを求めるとならば矢張りそれはこゝに求められるのではないか、少くとも私は今それをこゝに感じてゐるとは言へよう。

私は今あまりにも玉島川を吉野川にくらべて考へたがつてゐるやうである。が併しそれは必ずしも私自身の恣意によるのではなく、そのやうにする事がそのまゝ旅人の詩心に近づく事を考へるからである。一體、太宰府の官人達はこの遙々と鄉國から天ざかつた、ひなの生活に於てどのやうに鄉愁に惱まされてゐたであらうか。彼等の最も代表的な一人である憶良が

阿麻社迦留　比奈爾伊都等世　周麻比都都　美夜故能提夫利　和周良延爾家利

とうたつたのは彼にとつて都のてぶりがどんなに忘れ難いものだつたかを語るに外ならない。殊に旅人は貴族の一人として咲く花のにほふが如き奈良の生活を享樂し得た筈であり、それだけ太宰府の長官としての彼のこの田舍ずまひは一層わびしかつたであらうし、その上彼は赴任早々同伴して來た大伴郎女を喪つてゐるのであるから彼がその太宰府生活をどんなに鄉愁に惱まされて過したかといふ事は想像に難くないのである。彼の作歌の大部分はこゝに創作の契機を有つてゐたといつても過言ではあるまい。少くとも彼等の詩心を培養したものはこの鄉愁であつたといへよ

う、さうして彼がこのやうにはる〴〵と故郷の風物に想ひを馳せた時一番しつかりと彼等の心を捉へて離さなかつたものは何處であらうか。かう考へて私は先以て吉野に想到せざるを得ない。なぜなら持統文武兩帝の藤原朝を中心として前後の宮廷人が一番好んで遊んだ景勝といへばどこよりもこの瀧のみやこだつたからである。旅人も亦決してその例外ではなかつた。

帥大伴卿遙思二芳野離宮一作歌一首

隼人乃　湍門乃磐母　年魚走　芳野之瀧爾　尚不及家里

これは旅人が薩摩の隼人の瀬戸を遊覽して遙に芳野の瀧におもひを馳せた歌である。この海峽の景觀がどのやうに美しからうともそれは旅人にとつては唯單にこの瀧の瀬を憧憬せしめる一つのよすがに過ぎなかつたことをこの作歌が吾々に語つてゐる。そのやうな萬葉人が偶々新綠うちけぶる玉島川に臨んで吉野の瀧そつくりの俯瞰型勝景に接したのである。彼がそこに吾々以上に吉野を感じ得たのはむしろ餘りにも當然であり、この郷愁の滿たされる悅樂の中にこのやうな仙媛が生れ出た事も亦あまりに自然ではなからうか。

ところで吉野川は單にそのやうな景觀のつながりに於てばかりでなく萬葉集卷三所收の栢枝傳歌三首の背後に豫想される栢枝仙媛の傳に於て旅人の仙媛の誕生に一つの契機を與へてゐるやうである。不幸にして吾々は今日この傳說の全貌を知る由もないが、唯萬葉集の右の三首並びに左註とか、懷風藻に載せてゐる同じ傳說に關係のある詩句や題詞とかによつて想像し得る事は、實存した、或は實存したに近い吉野人味稻とこの淸淨の聖域に忽焉としてあらはれた仙媛との浪漫的な情話が說話の核心となしてゐたであらう事である。さうして更に耳寄りな話は右三首の仙栢枝の

歌の中に二首までが

此暮柘之左枝乃　流來者　梁者不打而　不取香聞將有（三八六）

古爾梁打人乃　無有世伐　此間毛有益　柘之枝羽裳（三八七）

とうたふ事によつて、傳說中に梁を打つといふ話のあつた事を示唆してゐる事である。男が吉野川で梁を打つて魚を捕つてゐる。ふと一本の柘の小枝が流れ寄り、男は之を拾つて家へ持ち歸り、柘の枝は急に美しい仙媛と化し、云々。二首の歌によつて、もしこのやうな神仙譚が想像出來るとすれば、柘枝傳說のこの女主人公こそ旅人の玉島川の仙媛に誰よりも一番身近に立つてはゐないか。いふこゝろは、異國趣味の愛好者彼旅人にとつて遊仙窟の崔女郎は確かに一つの粉本であつたにちがひなく、又玉島川の鄕土傳說とでもいふべき息長足姫尊の垂綸の說話も亦此の鄕土の訪問者たる彼の創作に忘れられてゐたとは考へられず、この意味に於て森本治吉氏などによつて考へられてゐるやうな兩者の關聯は決して否定すべくもないけれども、唯、私はそれ等二人のヒロインよりももつと近いところにこの柘枝の仙媛を想見したく思ふとい　事である。なぜならば彼女は旅人にとつては夢寐にも忘れかねたふるさとからのなつかしの訪客だからである。彼がどのやうな遊仙窟の愛讀者であつたにせよ、又彼がどのやうにこの鄕土にゆかりのある歷史的な奇蹟に感興を涌かせたにせよ、それ等の女主人公が所詮異國の乃至、たびさきの何者かに過ぎなかつたに對して、このふるさとびとがどのやうに深く又强く彼の詩魂をゆすぶつた事であらう。

最後に仙媛の風姿を年魚の關聯に於て多少共たどつて見るならば、一體旅人の歌のよさはどこまでも貴族的な淡々たるその風格にあるやうであるが、仙媛も亦多分にそれを反映していかにも淡々たる中に一種の氣品を藏して居り、

此の意味に於て諸注の多くが此の一連の創作を無視し去つてゐるにも係らず私はむしろ却つてその出來榮えを相當に高く買ふものであるが、それでは仙媛のこのやうな風格は何によつて達成されたかと考へてみるに、私見に從へばそれは前後十一首の和歌の中七首までが年魚を有つてゐるといふ事と何等かの關係がありさうである。彼女がこのやうに殆ど始終年魚の關聯に於て描かれるといふ事はとりもなほさず作者がどんなにこの魚を愛してゐたかを語るに外ならない。

さて私は翌朝七山を出て、うち續く秋日和に惠まれて昨日の同じ溪流に沿つて下山した。今日は幸にして元七山町長の三吉野氏と同行する事が出來たので此邊の風土地誌について少なからず敎へられたが、氏の話によると此の川筋は近年まで誠によく年魚が獲れたさうで地域はやはり鵜の首を中心として昨日遡つた谿谷の殆ど全流域に亘るといふ。もし今日から千年の昔を推す冒險が許されるならば天平二年の四月に旅人がこゝを遊覽した時にも清流には多數の若年魚がさ走つてゐたにちがひないのである。さうして一方當時吉野が鮎の名所であつた事はその徵があるから、してみれば旅人にとつて、玉島川の鮎等はそのまゝふるさとの吉野の鮎につながつたであらうし、さうして下記の萬葉集卷三の「柴うちてとる」魚が屢々想像されてゐるやうにもしも鮎であつたならば、玉島の潭に立つて水中を去來するこの清楚な魚群に見入つた旅人は實はこの魚によつてふるさとの傳說の栢枝の仙媛を思ひ出しつゝ更にそれによつて彼自身の仙媛を構想した事であらう。してみれば玉島川仙媛の有つこのやうに楚々たる風姿も亦所詮は作者旅人の切々たる鄕愁に負ふものであつて、それをしも單にこの地方の傳說である息長足姫尊の垂綸の故事につなぐ事によつてのみ解釋しようとする事は少くとも文學的創造に於ける眞の過程を洞察したものとはなし難いであらう。